

## 編集後記

『大衆文化』第二十四号では、近代文学を中心とした論考を六本、掲載します。新型コロナウイルス感染症対策による図書館の利用制限など、研究を続けるにも困難の多い二〇二〇年でした。次号までには、状況が好転しているとういのですが。

さて、今号掲載の石川巧氏「艶めかしき怪談——「人でのなしの恋」論（下）」では、前号に引き続き「人でのなしの恋」が取り上げられています。乱歩が関心を持っていた一つの映画と、ライフワークでもあった男色文化研究が同作に及ぼした影響とその効果について詳しく分析を行っており、今後「人でのなしの恋」論の基底の一つとなるように思われます。

井川理氏「犯罪・活動写真・探偵小説——ジゴマ騒動と犯罪フィクションをめぐる言説の再配置——」は、明治後期、映画『ジゴマ』が後の探偵小説家に与えた影響や、同作品が犯罪を誘発するという社会言説などについて考察した論考です。創作と現実との境が融解し、のちの探偵小説批判へとつながっていく構造を解き明かしています。

松田祥平氏「撞着する思想と形式——夢野久作『ドグラ・マグラ』を中心として」は、本格探偵小説というジャンル内に『ドグラ・マグラ』を捉え直し、謎の解明という探偵小説の本質を覆そうとした夢野久作の挑戦をどのよう

に評価すべきか、同作を手がかりに模索した論考です。

影山亮氏「占領下の時代小説ジャンルにおける〈新古交代〉言説」は、第二次世界大戦を境に時代小説が史実から講談へとその傾向を変えていくことについて、作家や作品内容などを分析し、「新」「古」作家の対立と見られていたその事象が、読者や掲載誌を拡大させていったとされています。

秀島希望氏「不可視化される占領と強調される戦争体験の残存性——野間宏『崩壊感覚』論」は、戦争の衝撃から将来像を見失った第二次世界大戦の復員兵を、壊滅的な被害を受けながらも未来へ向けて復興を始めた東京の都市空間に置き、丹念に主人公の心理に追った論考です。

米山大樹氏「江戸川乱歩旧蔵資料にみる探偵作家クラブの出発——「レヴェュー殺人事件」脚本と乱歩直筆原案を調査する」は、探偵作家クラブ事実上初の活動となる舞台脚本「レヴェュー殺人事件」が書かれた背景を、残された草稿から読み解き、乱歩の熱意やクラブ運営資金のやりくりなどを明らかにしています。本稿で扱われた乱歩考案の舞台演出については、石川巧氏の「艶めかしき怪談——「人でのなしの恋」論（下）」で記された映画観とも通じ、乱歩の映像への視点や関心について、一層理解が深まるかと思われ